

03/

化儀の正しい
意義について
(戒名・塔婆編)

日蓮正宗
青年僧侶改革同盟

はじめに

宗門は「戒名」がなければ成仏できないと言っていますが、
現在のような「死後戒名」は日蓮大聖人や
第二祖日興上人の時代にはありませんでした。

ゆえに、大聖人の法義の上から、故人の成仏には一切関係ありません。

また、宗門は「塔婆供養をしなければ、
故人は成仏しない」とも言っていますが、
故人のために「板塔婆」を建てて供養するというのは、
仏教本来の教えではありません。

日本人特有の社会習俗です。

歴史的には、まずインドに仏塔信仰がありました。

経典には、釈尊が入滅して遺骨が8カ所に分けられ、
それぞれに塔が建てられたとされています。

この仏塔の形が今度は、中国へ渡って、
五重の塔のような楼閣に変わっていったのです。

そして、この仏塔が、

日本においては供養塔としての意味に変質していきました。

最初は石塔でしたが、やがて木を用いるようになって、角塔婆となり、
さらには、これを略した板塔婆(平塔婆)が
用いられるようになっていったのです。

このような歴史から見ても、塔婆供養が成仏と関係ないことは明らかです。

1 「戒名」について

1. 「戒名」は「仏門に入る時に与えられる名前」のこと。僧侶の名前も戒名

戒名は仏教が中国に伝わった際、道教の「号」の風習を取入れて生れたものと言われていました。

大聖人の時代、当時の戒名は仏門に入った証として与えられる名前であり、戒律を守るしるしでもありました。多くの場合、出家者に対して授戒の師僧によって与えられました。

大聖人が、生前に在家の信徒に法名を与えられたことはあっても、死後戒名を付けられたことはありません。

2. 死後戒名の問題点

現代の葬式仏教で死後戒名について、次のような問題が出ています。

- ①故人が自分の戒名を知らない。
- ②馴染みがないので遺族が覚えられない。
- ③戒名料を請求され、金額によって差別される

大きな問題は、故人が自分の戒名を知らないということです。

「名は体を顕わす」といいますが、故人の名前に人生が収まっており、その名前で信心に励んできたのですから、その名前で回向するのが本義でありましょう。

また、戒名をつけても、馴染みのない名前ですから、遺族が覚えられない場合が多いのが実情です。

高額な戒名料は社会的な問題

社会的な問題として挙げられるのは、戒名を付ける際に寺院側が高額な戒名料を要求したり、その額によって戒名に差をつける事例があることです。いまだに世間の批判的的となっています。

宗門でも、高額な「戒名料」を請求する住職がいますが、今の宗門ではそういうことをやめさせる自浄能力はありません。

宗門が戒名に固執すればするほど、日蓮大聖人の仏法から遠のいていくのです。

実態 日如は所化に「寺院名簿を見て、戒名をつければよい」と指導

宗門では、住職が不在の時に所化が戒名をつける場合があった。現法主の日如は、新宿・大願寺の住職であった時に、所化に「戒名を付ける場合は、寺院名簿を見て、寺の名前を使って、つければよい」と指導していた。(〇〇院などに寺院の名前を使う)

また、日如は在勤者の野村信導が葬儀を受けた時に、「信導が受けたから、信導院でいいな」と言いながら、戒名を付けていた。

他にも、神奈川・応願寺の所化が住職の舟橋義秀に「葬儀の戒名をお願いします」と言った時に、たまたま遊びに来ていた住職の弟の船橋義量が「お前たち(雄政、信福)自分で戒名をつければいんだ。雄政院信福信士でいいじゃないか」と言っていた。

2 塔婆について

1. 「中興入道消息」からわかること

宗門は「中興入道消息」に塔婆が出てくるから塔婆供養は必ず必要だと、

繰り返し述べていますが、この論理はすでに破たんしています。

すなわち、普通にこの御書を読むと以下のことが明らかになるからです。

- ①本抄で言われているのは、丈六の卒塔婆で、
約5メートルの供養塔であり、今の塔婆とは全く違う。
- ②塔婆の題目は僧侶が書くようにとは仰せになっていない。
ゆえに、信徒が題目を書いても構わないことになる。
- ③自分で供養しているので、僧侶抜きで供養しても構わないことになる。

したがって、宗門が「中興入道消息」を引用して、塔婆を論じるならば、信徒が題目を書くこと、僧侶抜きで供養することを認めざるを得ないことになります。そもそも、今日のような板塔婆は後の時代に出来上がったものなのです。

2. 大聖人は「塔婆の功德」ではなく「題目の功德」を説かれている

この御書を正しく拝せば、「丈六のそとば(卒塔婆)をたてて其の面(おもて)に南無妙法蓮華經の七字を顕して・をはしませば」と、大聖人は「塔婆の功德」ではなく「題目の功德」を説かれていることがわかります。

すなわち、中興入道が念仏の題目ではなく、法華經の題目を顕されたことを大聖人はほめられ、題目の功德を説かれたのです。だから、この御書の末尾に「此より後々の御そとばにも法華經の題目を顕し給へ」と仰せられているのです。

3. 大聖人御自身、主要門下は塔婆を建てていない

また、御書に出てくる塔婆の意味は、「仏塔」や「法塔」の意味であったり、過去の故事、あるいは草木成仏を説くためのものであり、大聖人が信徒に「塔

婆を建てなさい」とは記された御書はありません。

事実、四条金吾や富木常忍、池上兄弟、南条時光にも勧められていないのです。大聖人御自身、亡き師・道善房のために塔婆供養をされた記録もありません。

宗門が言うように、「塔婆は故人の追善供養のために不可欠」というのであれば、大聖人の主要門下の肉親は成仏しなかったことになってしまいます。

実態 日顕が、十万本の塔婆の申し込みを「ご破算にした」と発言

学会の登山会があった頃、本山では塔婆の申し込みが常に一日数千本を越えていた。書き切れない塔婆はたまる一方だった。平成二年四月「全国宗務支院長会議」で、日顕はそれに関し、驚くべき発言をした。

日顕は、「塔婆の申し込みが多くて、本山で書き切れない塔婆が十万本以上もたまってきた。書くのも目茶苦茶に書いていた。それで、今までの(十万本以上たまっていた)塔婆は、一本大きい塔婆を立てて、ご破算にした」と発言したのだ。

この行為は、明らかに一億円相当のサギである。追善供養の真心を踏み躪った日顕の背信行為は、断じて許せるものではない。この日顕の行為を認めるならば、「塔婆供養しないと成仏しない」との宗門の主張はただの脅しだと認めることになる。

実態 日如の息子が、戒名をかくべきところを、線を一本引いて済ませていた

日顕は「書くのも目茶苦茶に書いていた」と言っていたが、本山では高校生にも塔婆を書かせていた。中には、音楽を聴きながら、鼻歌まじりに書いたり、現法主の日如の次男・正寛(現在は還俗)のように、戒名を書くべきところを墨で棒を一本、バツと引いて省略するような、いい加減な者が大勢いた。

おわりに

今や、創価学会は世界百九十二カ国・地域に発展し、
日蓮大聖人の仏法は世界に広がっています。

広宣流布というのは、決して日本の文化や習俗を
他の国に押し付けるものではありません。

「戒名」や「塔婆」は、あくまでも日本の習俗であり、
海外では通用しません。

大切なことは、いかにしてその国の人々に仏法の教義を教え、
幸福に導くかです。

まして、もともと仏教本来の教義にないものであり、
日蓮大聖人の時代にも存在しなかった化儀を、

“宗祖以来の伝統”などと偽り、

信徒に強要するような現宗門の在り方は、

時代から取り残されていくことは、間違いありません。

